2022年７月10日 礼拝メッセージ

「大きいことはできないけれど」　　牛田匡牧師

聖書 エステル記 4章10-17節

私たちは物事が自分の予想している通り、順調に運んでいる時には、何とも思わなかったり、それこそ「自分の行いが良いからだ」と思ったり、また敬虔（けいけん）な人であれば、神様のおかげと思って感謝したりするのではないかと思います。しかし、そのような考え方は、そのままひっくり返してみると、自分の予想もしなかった不都合な出来事や事実にぶつかった時、それを自分や他人、そしてまた神様のせいにしてしまうということにもつながるのではないでしょうか。ですが、そのような時に、もしも「あなたが今、ここにいて、このような辛くしんどい経験をしているのは、実は〇〇のためなんだ」と、言われたらどうでしょうか。その言葉によって、多くの人は、安心することができる。心が励まされ、力づけられ、おびえていた所から立ち上がることが出来るようになる、のではないかと思います。

今日は「部落解放祈りの日」です。週報の中には、「全国水平社宣言」も参考として挟んでいます。ちょうど今年は、この宣言がなされてから 100 年目です。その場所、その土地に生まれ、その家に生まれたというだけで、生まれながらにして差別を受けて来た人々に対して、「今こそ、自分たち、犠牲者であり殉教者でもある者たちが祝福される時が来た」「自分たち自身を誇り得る時が来た」「団結せよ」というこの宣言は、100 年を経た今日でもなお、読む者の心に突き刺さる力強い言葉です。しかし、残念ながら、部落差別を始め、民族差別も、性差別も、学歴差別も、諸々の差別が今もなお日本社会の中には根深く残っています。それでも、日本最初の人権宣言であったこの「水平社宣言」によって、「どうしてこんな差別があるのか」「何で差別される側に生まれたのか」という絶望の中にあった人たちが、「この差別そのものを無くしていくために、自分たちはここに生まれ、これまで生きてきたんだ」といって、考え方や生き方の方向を 180 度変えて、生きる力や立ち上がる力を得ることが出来て来た、ということもまた確かな事実なのだと思います。

そしてそのような気付きや立ち上がりの物語は、先ほど読んだ聖書の中にも記されています。今回の聖書のお話、ヘブライ語聖書の中にある『エステル記』という

お話もそうでした。その名前の通り、エステルという名前の少女、女性が主人公のお話です。物語の舞台は紀元前 5 世紀頃のペルシャだと考えられています。イスラエルの民、ユダヤ人たちは戦争に遭う度に、祖国を追われ、難民や捕虜となって諸外国へと離散していき、それぞれの場所で仲間たちと暮らしていました。この物語の主人公エステルも、そんな外国に暮らしているユダヤ人の一人です。彼女の両親は既になく、彼女はペルシャの首都スサに住む従兄弟のモルデカイによって養われていました。

ある時、ペルシャのクセルクセス王が新しい王妃(おうひ)を選ぶということで、国中から美しい乙女たちが集められ、エステルもモルデカイの指示に従って、自分がユダヤ人であることを隠したまま、王宮へと連れて行かれました。彼女はとても美しく、「彼女を見る人は、みな彼女に好意を抱いた」（エステル 2：15）と言われている程でしたから、すぐにクセルクセス王の目にも適い、王は彼女を王妃としました（2：17）。その後、王の下にいた宰相(さいしょう)ハマンが、モルデカイが自分にひざまずかないことに腹を立てて、国中のユダヤ人を皆殺しにするという「お触(ふ)れ」を出しました。そのことを知ったモルデカイは慌てて王宮に行き、王妃エステルに仕えていた宦官(かんがん)ハタクに事の一部始終を伝え、王妃から王に、この計画を思い留まるように説得するようにと伝えました。その続きが今回のお話です。

エステルは「たとえ王妃と言っても、王から呼ばれていないのに王の前に出て行くと、殺されてしまう」というのです（2：11）。しかし、モルデカイは言いました「このような時のためにこそ、あなたは王妃の位に達したのではないか」（2：14）、同胞のユダヤ人たちの危機を救えるのは王妃であるエステルしかいない。あなたは、そのために王宮に入り、王妃の位にまで昇りつめたのではなかったのか……。自分の養父であったモルデカイの言葉に、エステルは決意します。「私は王のもとに行きます。もし死ななければならないのであれば、死ぬ覚悟はできております」（2：16）。そして続く５章では、王の前に進み出たエステルは、無事に王から金の笏(しゃく)を差し伸べられ、寵愛を受け、ユダヤ人絶滅計画を取り消させることに成功します。最終的には悪だくみをしたハマンは失脚し、代わってモルデカイが王に次ぐ地位に就任したというところで、物語はハッピーエンドで幕を閉じます。

エステルという才色兼備なヒロインが主人公で、読者をハラハラさせながらも、最後は「めでたし、めでたし」で終わる勧善懲悪なこの物語は、いわゆる「昔話」のように物語を聞く人々にとっては、とても覚えやすく親しみやすい物語だったのだ

ろうと想像します。ですが、「主人公」と言いながらも、エステルは最初からずっと、自分では何も語らずに、モルデカイの指示で王宮に連れて行かれ、王によって王妃に選ばれるというように、常に他の人によって「〇〇される」対象としてしか描かれていません。そんなエステルが自分自身の言葉として初めに口にした言葉が、今回の 4 章 11 節と 16 節の言葉です。とくに 16 節の言葉には、養父モルデカイを始め同胞であるユダヤ人たちのために、自らの命すら賭けて、王の前に進み出ようという彼女の強い決意が表われています。そのように彼女に強く決意させたのも、その直前 15 節のモルデカイの言葉「このような時のためにこそ、あなたは王妃の位に達したのではないか」だったのではないかと思います。

「あなたの今があるのは、この日のためだったんだ」「この働き、この務めを果たすために、今までの苦労があったんだ」……そのような言葉をかけられると、多くの人は使命感に目覚め、心に火が焚きつけられるのではないかと思います。エステルがそうだったように、また「水平社宣言」を聞いた差別を受けてきた人たちがそうだったように……。それは踏みつけられ、苦しめられ、絶望の中に沈み込み、それこそ魂が死んでいたような人々にとって、死からの目覚め、引き起こしであり、されるがままの姿勢から、自ら立ち上がり歩み出すという生き方の転換でもあるでしょう。しかし、気を付けていないと、そのような使命感は独り善がりの独善や、排他主義にもすぐに結びついてしまいます。

「桃太郎」が鬼を退治して「めでたし、めでたし」なのと同じように、この『エステル記』もユダヤ人たちを絶滅計画から救い出し、そんなひどい計画を立てたハマンとその一族は皆処刑されて「めでたし、めでたし」となっています。人々が口伝えに語り継いでいく昔話の物語としては、その方が面白くて覚えやすいのでしょうが、現実は違います。差別をされてきた人たちが、差別をしてきた人たちに仕返しをしたところで、何も有益なものは生まれません。戦争もそうです。双方に言い分があり、自己正当化があり、その結果は双方に甚大な破壊だけが残るだけです。

今日が参議院議員選挙の投票日です。その選挙活動の期間中の一昨日、隣の奈良県で遊説中の安倍晋三元首相が銃撃されて亡くなりました。犯行の動機など、詳しいことはこれから次第に明らかにされていくのだと思いますが、暗殺という暴力によって、事態は良い方向には好転しないということだけは明らかでしょう。約 90 年前の「五・一五事件」や「二・二六事件」を思い出した人もいたのではな

いかと思います。それぞれ当事者たちにとっては、「もはや権力者を暗殺するしかない」という切羽詰まった思いで決行されたのでしょうが、その結果は人々の恐怖心、猜疑心の高まりと社会不安の増大によって、戦争への突入を防ぐことができませんでした。近年で言えば、アメリカ・ニューヨークで起こった「9・11」同時多発テロ事件もそうでした。それによって、「テロには決して屈しない」という「テロとの戦い」が始められ、20 年以上が経ちましたが、米軍が撤退した後も、アフガニスタンでは未だに混乱が続いているようです。

今回の安倍さん暗殺事件に対しても、各政党は「民主主義は言論と対話によって成り立つ、暴力には屈しない」と言っています。恐怖心、おびえる心や恐れる心は、柔軟な心を頑なにして時に暴力を生みます。聖書の中で、命の神ヤハウェや、イエス・キリストは、何度も何度も「恐れるな」と人々に呼びかけられました。短絡的に悪者と思われる相手を暴力によって排除したところで、新たなる暴力の連鎖を生むだけです。むしろ差別や暴力の構造を無くすためには、「命を大切にする」というすべての命を造られた神様の御心にしたがって、互いに認め合い赦し合い尊重し合いながら、共に生きていく関係性を作っていくしかありません。

私は安倍さんのアベノミクスや有事法案などの政策にも、また国会で 100 回を超える回数のウソの答弁を重ねてきたことにも、決して賛同はしていませんが、それでも彼の命もまた他の方々の命と同様に、神様から与えられた掛け替えのない命であり、暗殺などによって決して失われてもよい命ではありませんでした。安倍さんの霊も、今は天の神様の御許に帰られていることですから、突然彼を失い、深い悲しみの中にあるご遺族や友人たちの上に、神様からの慰めがありますようにと祈ります。

私たちには、大きいことはできません。「自分には大きいことができる。その使命を果たすために、これまでの苦労があったんだ」……。そのように思う時、私たちは自己正当化、独善と排他主義と、紙一重の所にいます。むしろ、大きいことはできないけれど、たとえ小さくても心の中を恐れや不安でいっぱいにしてしまわないこと、今与えられている命やもの、こと、場所に感謝すること、自分自身と周りの人たちの関係性、一つ一つの命を大切にすること。それらを通して、私たちはこの世界を善いものに作り変えていく、命の神様の御心に満ちた「神の国」が実現していくことの、小さなお手伝いをしていくのだと思います。